
STEP UP！～幼なじみの場合

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STEP UP！〜幼なじみの場合

【Nコード】

N6167I

【作者名】

MMR

【あらすじ】

幼なじみのあいつから告白されて、はじめて自分の気持ちに気付いたけれど、恥ずかしいのと慣れていないのとで素直になれない。そんな心揺れ動いている時のワンシーン。

どうして今日も言ってくれないの？

あいつのせいにながら、わたしはわたしで今更しても遅い後悔をする。

いつもどおり、小さい頃から通い慣れたあいつの家まで行ってこ両親に「あら今日も早いのねえ、息子の将来も安心だわ」なんて恥ずかしいことを言われながら部屋まで行って、ノック連打でたたき起こして。

で、時間にあわてていきなりわたしの前で着替えを始めるあいつにすねへの足蹴りを決めて、先に降りた玄関で制服の乱れをチエックして。

着替えてきたあいつに「おはよう、今日も寒いな」とか言われて、せっかくきれいなところを見せようと努力しているというのに、何も気づかないような素振りにイライラして。

「何のんきなこと言ってるのよ！ さっさと行くよ！」

と、あいつが今まで布団に入っていた分が残っているのか、それともわたしの体温なのか……ほんのりと暖かく感じるあいつの腕をつかんで、玄関からひきずり出す。

だいたいこんな感じで今、二人並んで一緒に通っている高校に向かっている。

端から見たら、どんな恋愛ゲームの幼なじみ同士の織りなす話なんだって話だけだ。

ただ、どうもその話の流れをわたしが止めてしまったような気がする。

「ところでね」

あいつの突然の話の切り出し方に怖さ半分、期待を半分。

「おれさ、今日の英語の課題忘れてたことに今気づいた」

忘れてた。諦めがほとんどを占めてるんだっただけ。

わたしは飲んでいた息を一度にはき出して。

「はいはい、見せてあげるから安心しなさいな」

わたしの言葉に、あいつの緊張した顔が一気に緩んでいく。

そんなころころ変わる表情に……わたしは、ひかれてしまったのかな。

小さい頃から一緒にいすぎて、というのによく聞く話だったけど、まさか自分がそうなるとは思わなかった。

気づかされたのはあいつのせい。

「お前のこと……その、好きなんだけどさ」

いつもと同じ、いつもと変わらない高校へ向かう道の途中で、いつもと違うことを言われた日。

「できれば、おれと……」

「なーに冗談言っちゃってるのよ、もう、いくら相手はわたしだからってからかわないでよね」

恥ずかしさと、こんなことに慣れていないのと、それと……あいつを相手にして、自分を素直に出すなんてできなくて。

「冗談交じりに、あしらってしまっていた。

別に、それからあいつとの距離が遠くなったわけじゃない。縮まったわけでもない。

ただ、変わったことはあった。

このあいつの告白が、わたしの気持ちを確信した瞬間だったこと。

「やっぱり、付き合う気は……」

「そういうこと言うのは本当の相手にしてよね」

「なあ、おれと」

「却下」

せつかく何度もチャンスはあったのに、わたし自身の心の準備が
ついていない、好きだということを言われて認めてしまうのも何だ
か悔しい、そんな色々な理由を強引につけては、あいつの言葉をさ
えぎっていた。

今考えれば、そんなことをなげしてしまったのか、わざわざする
必要があったのか、わからないまま。

いつでも、何回でも言ってくれると油断していたのかもしれないか
った。

告白してくれたのも突然、そして。

言われなくなったのも突然。

「めつきり寒くなったよなあ、身も心もあつたまりたいって感じだ
な」

「心も……」

「どうかしたか」

「ううん、なんにも」

冗談めいた告白がなくなって二週間。あいつの「一つ一つの言葉が
深い意味を持つてるんじゃないかと無駄に勘繰り過ぎてしまうよう
になってしまった。

もしかしてわたしに愛想を尽かして他の女の子を……

考えるだけで恐ろしかった。ずっと一緒にいたのに、いきなり「
カノジヨができたし、誤解されないようにあまり会わないようにし

てほ」

「お、おい！いきなり何を」

「わたしも、ずっと、すきだったよ……」

最後まで想像しきることはできなかった。今まで誰かを好きになつたこともなかったから、想いの伝え方も分からなかったけど。

それでもいつもの玄関から引きずるような感じじゃなくて、少しでも気持ちが伝わるように、わたしがこんな気分になっている時に限って何もしないあいつに恨みの意味も込めて……腕にしがみついてやった。

しばらくあいつはそのまま固まっていたけど、車が横を通り過ぎていくので我に返つたと同時に、わたしの言つたことを理解したようだった。

「ずいぶんと遅い返事なんだな」

「なによ、あんたが最近言わないからじゃないのー！」

「おれのせいだよ！ 何度も何度も言つてやっってるのに適当にあしらつてくるから無駄だと思つてやめたんだぞ」

わたしが聞きたかつたことが、話を切り出す前に明らかになつていく。その理由はもっともだったけど、このまま引き下がるのも悔しくて、言い返してしまっていた。

「なんでもう一押しがないのよ、バカ！」

「なんて自分勝手な……言っておくが、今でも好きだとは一言も言つてないんだぞコノヤロウ」

「ふんだ、今更そんなこと言えるほどわたしのこと忘れられてるとは思えないけど？」

「冗談はそのくらいにしとけ、とにかく相手がおれだからってからかうのはよせ」

そのわたしが言った覚えのある言葉に気づいてあいつを見ると、
わざとらしく顔を反らすのが分かった。

まったく、それであしらっているつもり？

でも仕方ない、今までさんざんあしらってきたもんね。ここは黙
って、あしらわれておくことにしようかな。

結局、しばらくはこのままみただけど……でも、きっと今のわ
たしたちはそのくらいでちょうどいいのかもしれない。

それは、あまりにも近すぎる幼なじみという存在から、少しだけ
ステップアップできた日の物語。

(後書き)

幼なじみ設定を好きに書いたらこうなった。オチも何もありゃしねえ。

「ねえ」

「どうした？」

「このわたしたちの物語ってさ、他の更新が止まってるからってつなぎで作られている感じがしない？」

「まさか。そんなはずないだろ」

「でも……あそこで汗流している人がいるように見えるんだけど」「いや、ありやせつかくもらったアドバイスが実行できなくて焦っているんじゃないか？ というか、おれら幼なじみってことになってるけどさ、あまりその設定活かさきれていないと思うんだがどうよ」

「な、なんか汗が滝のように流れはじめた気が……」

登場人物のフリートーク、なるうに小説を置くずっと前にやっていたの思い出して久々に。
言っていることがなにとも切ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167i/>

STEP UP！～幼なじみの場合

2010年10月8日14時59分発行